

目次

はしがき

序章	国際政治史としての日本外交史……………	片山慶隆… I
----	---------------------	---------

1	本書の特徴	I
2	本書のねらい	3
3	本書の構成	6

第I部 「開国」から「二等国」への道

第1章	変革と動乱の時代——黒船来航から江戸幕府崩壊まで、一八五三～一八六七年……………	後藤敦史… 17
-----	--	----------

1	幕末前史——一九世紀前半	18
---	--------------	----

「内憂外患」の時代 黒船前夜の国際環境

2	「開国」に向けて——一八五三～五八年	19
---	--------------------	----

黒船来航への対応 「開国」方針の推進とその挫折 一八五〇年代の東アジアの国際環境

3	大政委任を求めて——一八五九～六三年	23
---	--------------------	----

「鎖国」への復帰を公約 將軍の上洛と攘夷実現の模索 一八六〇年代前半の欧米諸国の対日外交

4 政局の主導権をめぐる——一八六四～一八六六年 28

大政委任の実現 高まる幕府への反発 変容する世界観

5 幕府の崩壊——一八六七年 31

最後の將軍慶喜の政治と外交 大政奉還から王政復古へ

コラム1 岩瀬忠震（一八一八～一八六二）——「開国」後を見ずえ、海外渡航を目指した幕臣 21

第2章 「外国交際」「隣好」と国家建設……………森田吉彦… 36

——明治政府の誕生から壬午事変直前まで、一八六七～一八八二年

1 明治国家の出発 36

「外国交際」と国家建設 「隣好」の実際 日清修好条規と書契問題 岩倉使節団の歴訪

2 「隣好」の展開 42

留守政府の活動 副島外交の展開 征韓論政変と「隣交」 大久保政権と台湾出兵

3 「外国交際」と「隣好」の交錯 47

樺太千島交換条約の締結 日朝修好条規——「隣交」の進展 西南戦争と明治政府の転機

条約改正の模索 「外国交際」と「隣好」の連鎖

コラム2 アーネスト・サトウ（一八四三～一九二九）——公使館を支えた親日家 (Japanophile) 41

第3章 変容する国際環境の中で……………鈴木 悠… 55

——条約改正予備会議から三国干渉まで、一八八二～一八九五年

1 条約改正会議と東アジアにおける清朝の台頭 56

一八八二年以前の日本の国際環境 条約改正予備会議と、清朝の宗主権外交の本格化——一八

第4章 一等国への道

八二〇八四年 清朝の優位性確立と、条約改正本会議——一八八四〇八七年

2 朝鮮情勢の安定化と条約廃棄論の浮上——一八八七〇九二年 62

3 日英通商航海条約の締結と日清戦争 64

条約改正交渉の再開と朝鮮情勢の不安定化——一八九二〇九四年 日清戦争——一八九四〇九五年

コラム3 井上馨（一八三六〇一九二五）——明治期最長の外務卿・外相 59

片山慶隆： 72

——日清戦後から関税自主権回復まで、一八九五〇一九一一年

1 一九世紀末の東アジア国際政治と日本 72

朝鮮半島をめぐる日露関係 アメリカの影——フィリピン領有・ハワイ併合・門戸開放宣言

「中国分割」と義和団戦争

2 日英同盟と日露開戦過程 75

日英同盟の成立 ロシアの満洲撤退問題と韓国をめぐる国際関係 日露開戦への道

3 日露戦時外交 79

韓国支配の進展——日韓議定書と第一次日韓協約 イギリスとフランスの動向 日英同盟の改定

——同盟範囲拡張問題と韓国問題 ポーツマス条約と桂・タフト覚書——韓国保護国化の国際的承認

4 大陸政策の展開と対列強外交 83

日露協約と日仏協約——「三国協商」の枠組みへ 動揺する日米関係——移民問題と高平・ルート

協定 満洲をめぐる国際関係

5 帝国の完成 88

韓国併合 日本政治の安定期 条約改正と第三次日英同盟

第Ⅱ部 二つの世界大戦と日本

第5章 東アジア秩序の転換点……………中谷直司…95

——辛亥革命からワシントン会議まで、一九一〇～一九二二年

1 一〇年間の見取り図——二度の「千載一遇の光輝」とその帰結 95

2 辛亥革命の衝撃 97

権益拡張をめぐる政策論争 国際政治の制約と国内政治の混乱 「満蒙」権益の出現と日英同

盟の衰退

3 世界大戦の衝撃 101

参戦 対華二十一カ条要求 大国間協調政策への回帰 外務省内の勢力範囲撤廃論とロシア

一〇月革命

4 大戦の終結と戦後 109

シベリア出兵 パリ講和会議と新四国借款団交渉 国際連盟の発足とワシントン会議

コラム5 小村欣一（一八八三～一九三〇）——日本の「新外交」の発明者 107

第6章 国際協調外交の展開……………西田敏宏…117

——ワシントン会議後から満洲事変まで、一九二二～一九三一年

1	両大戦間期の世界と日本	117
	戦間期の国際関係・日本外交の二面性	ワシントン体制をめぐる議論
2	ワシントン会議後の対中国政策	119
	ワシントン会議後の東アジアと日本	第一次幣原外交の対中国政策
	特別会議	日ソ関係と対中国政策におけるソ連
3	中国国民革命への対応	124
	北伐開始と二分五厘付加税実施問題	中国内政不干渉政策と南京事件
	政策	済南事件と張作霖爆殺事件
4	国際協調外交の挫折	131
	国際連盟・不戦条約と東アジア	第二次幣原外交の対中国政策
	干犯問題と危機の深まり	幣原外交の行き詰まり
		満洲事変の勃発と国際協調外交の終焉
コラム6	幣原喜重郎（一八七二―一九五一）――戦前の国際協調外交の指導者、戦後の憲法第九条の発案者？	121
第7章	国際秩序への挑戦	樋口真魚…
	――満洲事変の拡大から日中戦争勃発まで、一九三一―一九三七年	138
1	満洲事変と国際連盟――「新条約体制」の成立	139
	国際連盟における攻防	満洲国承認問題と九国条約
	約体制」の成立	リットン報告書
2	二国間関係の修復を目指して――広田外交の可能性と限界	144
	対中国関係改善の試み	天羽声明と「アジア・モンロー主義」
	分離工作と広田三原則	対欧米関係修復の試み
		華北

3 多国間協調の再構築を目指して——既存秩序からの離脱 149

軍縮条約からの離脱 脱退後の対国際連盟政策 日独防共協定の締結 日中直接交渉の開始

佐藤外交への期待 日中戦争と国際連盟・九国条約

コラム7 佐藤尚武（一八八二～一九七二）——連盟派外交官の奮闘と挫折 153

第8章 世界大戦の中の日本——日中戦争の本格化から敗戦まで、一九三七～一九四五年……森 茂樹…… 157

1 日中戦争と枢軸形成の端緒 157

日中戦争と米英独ソ 日独伊の接近と米英の対応

2 欧州と東アジアの連動 161

第二次世界大戦と日独伊三国同盟 武器貸与法と日米交渉

3 連合国対枢軸国 165

独ソ戦勃発と石油の対日禁輸 日本の戦争準備 日本と米英の開戦

4 アジア・太平洋戦争の展開 169

南方作戦 中部・南西太平洋の戦い 大陸方面の戦い ソロモン諸島の戦いと大陸方面への影響

5 日本の敗戦と第二次世界大戦の終結 174

絶対国防圏と大東亜会議 連合軍のビルマ反攻と一号作戦 マリアナ・フィリピンの失陥

ソ連参戦と原爆投下

コラム8 東條英機（一八八四～一九四八）——作戦と経済の狭間で苦悩した軍人宰相 167

第Ⅲ部 国際社会への復帰から経済大国へ

第9章

戦後日本の出発点——占領の開始から独立まで、一九四五～一九五二年……………矢嶋 光……………185

1 敗戦・占領・改革

185

アメリカの戦後秩序構想と対日占領政策

敗戦と占領の受容

占領改革と占領政治

非軍事

化と日本の安全保障

2 改革から復興へ

192

冷戦と占領政策の転換

経済復興と日米の「同盟」関係

講和論争と国内冷戦

朝鮮戦争の

勃発と再軍備

3 講和外交の展開

196

アメリカの冷戦戦略と対日講和

外務省による準備作業

吉田茂のリーダーシップ

講和を

めぐる日米交渉

4 サンフランシスコ体制の成立

200

講和条約と安保条約

沖縄をめぐる問題

日ソ関係と国連加盟

アジア外交と戦争賠償

コラム9 鈴木九萬（一八九五～一九八七）——占領下の外交官

187

第10章

外交の再出発——独立から安保改定まで、一九五二～一九六〇年……………池田慎太郎……………205

1 外交活動の再開

205

国際社会への復帰

朝鮮休戦と再軍備

反共外交の挫折

2 外交空間の拡大 210

アジアへの「復帰」 日ソ国交回復交渉 日ソ共同宣言

3 国連中心主義と「アジアの一員」 214

外交活動の三原則 東南アジア外交 北東アジア外交

4 沖縄問題と安保改定 218

アメリカ統治下の沖縄 安保改定交渉 新日米安保条約

コラム10 ジョン・M・アリソン（一九〇五～七八）——知日派の職業外交官 207

第11章 高度経済成長と冷戦変容 神田豊隆… 224

——池田政権成立から日中国交正常化まで、一九六〇～一九七二年

1 「経済の季節」 225

「寛容と忍耐」——池田像の演出 経済外交 「憲法も安保も」 「経済の季節」と政治

2 変容する冷戦構造と池田外交 228

米ソ緊張緩和と中国の孤立 米英との不一致 米中対立の昂進と池田外交の限界

3 アジア冷戦の激化と佐藤外交 231

岸の弟、吉田の弟子 「中国」から「沖縄」へ 中国の孤立化を支持する外交——韓国、台湾、

ソ連、東南アジア 中国という長期的課題

4 沖縄返還と「米中ソ」三極の国際政治 235

佐藤のリーダーシップと沖縄返還 「米中ソ」三極の浮上とニクソン外交 佐藤による対中接近

の限界

5 国際政治のなかの日中国交正常化 239

日中国交正常化の準備 北京における交渉 日中国交正常化の国際政治的意義

コラム11 佐藤栄作（一九〇一～七五）——そのリーダーシップの源泉

231

第12章

経済大国の模索——日中国交回復後から鈴木内閣退陣まで、一九七二～一九八二年……武田 悠……244

1 戦後処理以後の日本外交 244

デタント、多極化、グローバル化 「経済大国」日本の登場

2 相次ぐ危機と日本の対応 246

ブレトンウッズ体制の崩壊から石油危機へ デタント下のアジアと日本

3 危機の後の国際協調 248

エネルギー問題と南北問題 日米経済摩擦の激化 G7サミットへの参加 安全保障政策の

再確認 福田ドクトリンの可能性

4 新しい課題への対応 255

環境問題での孤立 インドシナ難民問題と人権外交

5 アイデンティティの模索 257

総合安全保障論と環太平洋構想 デタントの終焉 「西側の一員」としての日本

コラム12 福田赳夫（一九〇五～九五）——「世界の福田」を標榜した財政家 251

第13章

「国際国家」を目指して………山口 航………263

——中曽根内閣誕生から五五年体制崩壊まで、一九八二～一九九三年

1 「新冷戦」の緊張 263

米ソ「新冷戦」「西側の一員」新自由主義の時代 対アジア外交の進展

2 冷戦末期の摩擦 268

ゴルバチョフ登場 経済摩擦の激化とブラザ合意 求められる国際貢献 歴史認識をめぐる問題

3 冷戦の終結 272

マルタ会談 「世界に貢献する日本」 バブル景気と「日本異質論」 天安門事件

4 冷戦後の模索 276

ソ連の崩壊 湾岸危機と自衛隊の海外派遣 バブルの崩壊と冷戦終焉の波紋 緊張する東アジア
情勢

コラム13 中曽根康弘（一九一八～二〇一九）——くれてなお命の限り蟬しぐれ 265

第IV部 混迷する世界と日本の模索

第14章 「失われた一〇年」と模索する日本外交……………村上友章… 285

1 アメリカ単極のリベラル国際秩序 286

——朝鮮半島危機からイラク派兵まで、一九九三～二〇〇六年

「能動的な秩序形成者」日本 日米同盟の「漂流」

2 東アジア共同体の萌芽 290

東アジアにおける「地理と歴史の復活」 アジア通貨危機と「人間の安全保障」

3 「対テロ戦争」とアメリカ 294

九・一一テロとイラク戦争 同盟再編と国連改革

4 アジアの世紀 299

六者協議と東アジア共同体 「日米黄金時代」と失われた中国との対話

コラム14 緒方貞子（一九二七～二〇一九）——外交史家にして現場主義グローバルリスト 295

第15章 「インド太平洋」の時代……………楠綾子… 304

——第一次安倍晋三内閣以後の日本政治・外交、二〇〇六～二〇二五年

1 歴史的な政権交代 305

小泉以後 民主党政権——マニフェスト政治とその帰結 東日本大震災——創造的復興と

「災後」の社会に向けて

2 民主党の外交 311

「対米自立」を指して 冷え込む日中、日韓関係 日米同盟の深化と拡大——その1

3 自公政権ふたたび 314

憲政史上最長 「官邸主導」の光と影

4 「自由で開かれたインド太平洋」政策 317

平和安全法制 未完の戦後処理 日米同盟の深化と拡大——その2 「自由で開かれたインド

太平洋」政策——日本発の地域秩序構想 流動化する国内政治、防衛力の抜本的強化

コラム15 小沢一郎（一九四二～）——政権交代への執念 307

関係年表 329

事項索引

人名索引